

虫送りの歴史

火を使って虫を駆除することは、古いもので、紀元前8世紀（約2700年前）の中国でその記録がみられます。

日本において「虫送り」に類する行事がはじまった時期は定かではありませんが、少なくとも江戸時代には全国各地で行われていました。

加賀藩においても、河北郡・石川郡は金沢城に近いことから、事前に届出をする制度が元禄元年（1688）に始まったことが記録として残っています。

虫害が発生すると稲の出来が悪くなって飢饉に繋がることがあり、害虫駆除法を記した書物『除蝗録』^{じょこうろく}（江戸時代後半）において虫害は「天下の一大患」^{いちだいかん}と表現されています。同書では、油の膜を田んぼに張り、そこに飛び込んだ虫の動きを封じる方法を紹介しており、「虫送り」は前時代的な方法であると述べています。

駆除技術の変化と共に、虫送りは害虫駆除というよりは豊作の祈念や、村の若者が力を競う季節の行事としての性格が強くなっていきました。

野々市市域でも江戸時代には多くの地区が虫送りを行っていたと推測されます。時期によって中断することもありましたが、押野・御経塚・富奥地区が現在もその行事を継承しています。